

歴史的解釈活動支援に向けた風刺画の教材化

Historical Cartoons as Learning Materials to Enhance Historical Interpretation

室谷 大貴, 瀬田 和久, 林 佑樹

Daiki MUROYA, Kazuhisa SETA, Yuki HAYASHI

大阪府立大学大学院 人間社会システム科学研究科

Graduate School of Humanities and Sustainable System Sciences, Osaka Prefecture University

Email: muroya@ksm.kis.osakafu-u.ac.jp

あらまし：学びの文脈において、物事を推論しその背景を解釈する活動によって養われる論理的思考は様々な学問分野で重要な役割を果たす。本研究では、歴史的解釈活動を題材として、学習者自身が能動的に歴史事象に解釈を与える活動を実践し、物事の背景を洞察する学習態度を涵養することを目指した学習環境を提案する。本稿では、歴史的解釈を行う際に必要となる“観点”を学習者に認識させるために、学習教材として意味情報を付与した風刺画を利用した学習活動を議論する。

キーワード：歴史的推論, 風刺画, 歴史的解釈活動

1. はじめに

物事の背景を解釈する活動によって養われる多角的な見方, 論理的な考え方は, あらゆる学問分野において重要な役割を果たす。一方で, 教師から学習者への知識の教授を中心とした学習形態では, 多くの学習者にとって物事についての明示的知識の習得に留まってしまうことが多い。

歴史学習においても, 歴史的推論の重要性が指摘されており, 歴史事象の原因や背景を解釈する学習態度が求められている(例. 世界的に知名度の低かった日本の日清戦争での勝利は, 欧米列強の中国進出の契機となり, 帝国主義時代の扉を開いた)。しかし, 多くの学習者は, 歴史事象をどのような“観点”のもとで解釈するべきなのかの方略を有していないため, 歴史事象が起きた「年代」や「発生場所」などの表面的な知識のみの学習に留まる傾向にある⁽¹⁾。

本研究では歴史事象を題材として, 学習者自身が能動的に深掘りし, 解釈を導出するという一連の活動を支援する学習環境を開発し, 物事の背景を学び取る学習態度を養うことを目的とする。本稿では, 学習者に歴史的解釈の“観点”を認識させる学習教材としての「風刺画」⁽²⁾に着目し, 風刺画の情報を計算機可読な形にすることで, 計算機が適応的に学習者の歴史的解釈活動を促す「問い」を提示する学習活動支援のアイデアについて議論する。

2. 歴史的解釈活動支援に向けた環境設計

本研究が学習教材として利用する風刺画の特徴は, 古文書や古記録などの文字資料と比較して, 歴史事象を多面的・多角的に捉えることができる点が挙げられる。さらに, 風刺画のような絵画資料を学習に活用する意義として, 学習者にその当時の人物が何を考えていたのかについて洞察する機会を提供できる点や, 社会的な問題や出来事を効果的に要約し, 学習者に提示できる点などが挙げられる⁽³⁾。

このような特徴を持つ風刺画を利用した学習活動として, 本研究では黒田が定義した歴史学者が絵画

表 1 本学習環境における学習活動

読解方略(フェーズ)	学習活動
(1) 事実認識	描かれている各オブジェクトが何を表現したものかを読み解く
(2) 関係認識	描かれている各オブジェクト間の違いが何を意味するかを読み解く
(3) 意味認識	(1), (2) で得た理解を統合し, 風刺画の背景を読み解く

資料を読み解く際に用いる 3 つの方略⁽⁴⁾を参考に示す。我々が本稿で提案する学習活動との対応を表 1 に示す。

3. 風刺画を利用した学習活動と内部構造

図 1 に, 風刺画を利用した学習活動とその活動を支援するために計算機が内部で扱う情報を示す。本研究では, 学習者が歴史的解釈活動を行うための土台を構築できるように, 2 章で述べた 3 つの読解フェーズを適宜横断しながら, 段階的に風刺画を読み解いていけるように学習活動がデザインされている。加えて, 各フェーズにおける学習者の読解活動を深めるために, 風刺画に意味情報を付与し, 学習者の読解状況に沿って, その読み解きを促す「問い」を計算機が動的に提示する仕組みを採っている。

計算機が内部で扱う意味情報として, 図 1 に示される[a]風刺画に表現されているオブジェクト, [b]オブジェクトの属性・それらの関係, [c]風刺画で用いられる表現技法, [d]風刺画の各オブジェクトに設定した視線対象エリア, に関する情報を扱う。本研究では, アイトラッキングデバイスを利用し, [a]と[d]の対応に基づき, 計算機が学習者の興味を推定することを想定している。さらに, [c]に関して, 黒田は風刺画を読み解く際には風刺画特有の表現技法を手がかりに読み解いていくことが効果的であると主張しており, 本稿では Historical Society of Pennsylvania⁽⁵⁾が定義している風刺画の表現技法 (① Symbolism ② Irony ③ Analogy ④ Exaggeration ⑤ Inference) を参照する。また, 学習者に提示する「問

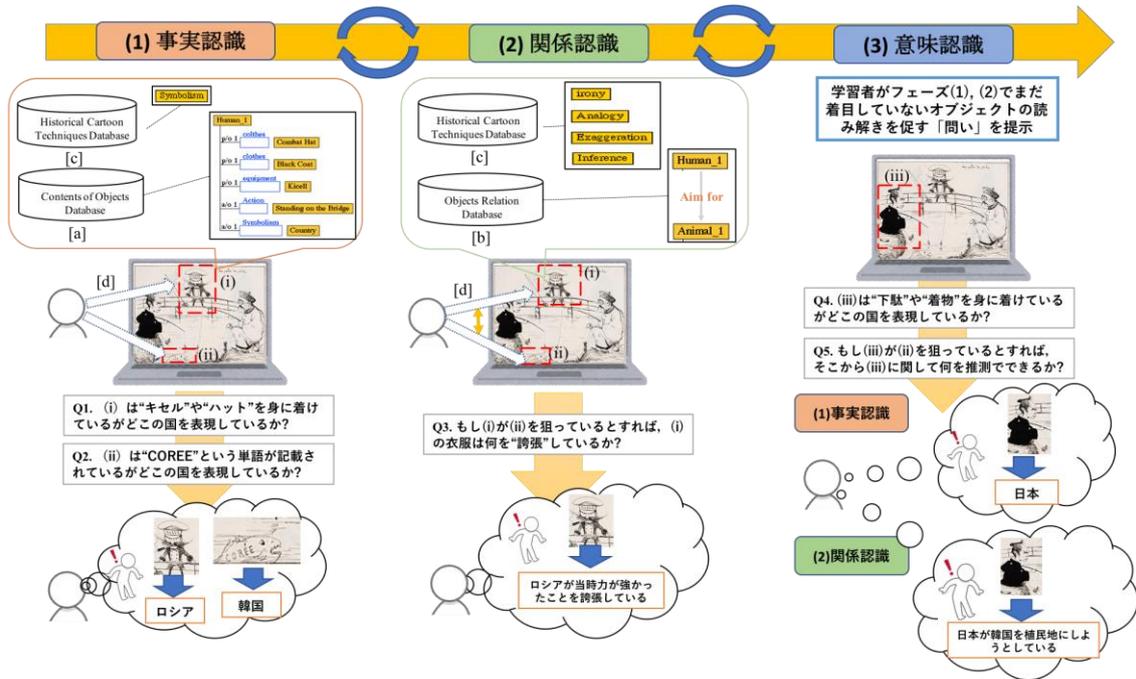


図1：学習活動とシステムの内部構造

い」生成の仕組みは、Jouault ら⁽⁶⁾が提案している Question Generation Framework の仕組みを応用し、事前に[c]の意味情報に基づき設定された問いのテンプレートと、その他の意味情報([a], [b], [d])を用いて学習者に風刺画の読み解きを促す「問い」を提示する。以下、各読解フェーズを説明する。

(1) 事実認識：事前に各オブジェクトに設定した[d]の情報に基づき、学習者が着目しているオブジェクトを推定する。そして、[b]の意味情報(例. 図1の(i)の“髭”を蓄えた“コート”を着ている男は“国”を表現している)と、[c]の意味情報のうち「象徴化」(Symbolism)の表現技法を組み合わせることにより、各オブジェクトの「Symbolism」を考察させる「問い」(例. 図1のQ1, Q2)を生成する。学習者はこの「問い」に基づき、各オブジェクトが何を風刺して表現されたものであるかを考察できる。

(2) 関係認識：(1)のフェーズで学習者が着目したオブジェクト間の視線の動きに基づき、学習者がどのオブジェクト間の関係に興味を持っているのかを推定し、[b]の意味情報(例. 図1(i)は(ii)を狙っている)と、symbolismを除いた[c]の意味情報(Irony, Analogy, Exaggeration, Inference)を組み合わせ、各オブジェクトの意味理解を促進させる「問い」(例. 図1のQ3)を生成する。提示された「問い」により、オブジェクト間に込められた製作者の意図を学習者に考察させる活動を促す。

(3) 意味認識：学習者は、(1)、(2)のフェーズにおける読解活動で考察したことを踏まえ、各オブジェクトの時代背景を深掘りする活動を実践する。吉川はこのような個々のオブジェクトの時代背景を読み

解く活動が、歴史的背景を洞察するというマクロなレベルの解釈活動に寄与すると主張している⁽⁷⁾。一方で、本フェーズにおける読解活動で産出される解釈は、学習者により異なるため、予め知識ベースを用意し、個々に追従する適応的支援は困難である。そこで本研究では、(1)と(2)のフェーズで学習者がまだ着目していないオブジェクトの読み解きを促す「問い」(例. 図1のQ4, Q5)を学習者に提示する。これにより再度(1)、(2)のフェーズの読み解き活動を行わせ、マクロな歴史的背景を読み解く土台の再形成を促すことを考えている。

4. おわりに

本論文では、風刺画を利用した学習者の歴史的解釈構築活動を支援するための学習環境について議論した。今後は、本稿のアイディアに基づくシステムを開発し、この有用性を検証していく予定である。

参考文献

- (1) Spoehr, K. T., & Spoehr, L. W.: “Learning to think historically”, *Educational Psychologist*, 29(2), pp71-77 (1994)
- (2) Georges, F. B.: “Une partie de pêche”, トバエ 第1号 (1887)
- (3) Stradling, R.: “Teaching 20th century European history”, Council of Europe (2001)
- (4) 黒田日出男: “姿のしぐさの中世史”, 平凡社(1986)
- (5) Historical Society of Pennsylvania, <https://hsp.org/>
- (6) Jouault, C., Seta, K., & Hayashi, Y.: “Content-Dependent Question Generation Using LOD for History Learning in Open Learning Space”, *New Generation Computing*. Vol.34, No.4, pp367-393 (2016)
- (7) 吉川幸男: “歴史授業における絵画教材の構成と歴史理解の動態-歴史に関する発話の分析を通して-”, 研究論叢 50号, 山口大学, pp.133-152 (2000)